
ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

ごくでヴある

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディアボロは非日常な日常に投げ込まれる！

【Nコード】

N7397X

【作者名】

ごくでヴある

【あらすじ】

この話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられています。そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツァ・ダストしてください。

後、ジョジョの原作キャラは最初にブッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないと思っていてください。

スタンドは主に第6部までのスタンドが出ます（スティール・ボール・ランを作者が持っているため）

後、スタンドの解釈が間違っていると気づいたときはぜひとも意見をください！今後の参考にもなります。

・・・注意書きが長くなりましたがあらすじです。

ディアボロは不思議なダンジョンから放り出され、プッチと戦い死んだ。

そして再び死に続けていくのだった。

しかし、再び死に続けたディアボロはあるところに迷い込んだ。

そしていつまで経っても死なないことに不思議に思ったディアボロは回りの搜索に行くのだった。

世界の一巡の終わりと新たな始まり（前書き）

あらずじにも書いたようにこの話には多少ディアボロの大冒険の設定が加えられてます。

そして原作のディアボロが大好きだ！という方はあまり期待しないで見るかそのままバイツァ・ダストしてください。

後、ジョジョの原作キャラは最初にブッチ神父が登場しますが以後登場しません。

ディアボロ以外は出ないと思っていてください。

スタンドは主に第6部までのスタンドが出ます（スティール・ボール・ランを作者が持つていないため）

世界の一巡の終わりと新たな始まり

「・・・今日もまた最後までたどり着けなかったか」

男はそうつぶやくと部屋の中の布団に寝転んだ。

男の名はディアボロ。

イタリアの元ギャングのボスだ。

彼は、世界を支配できるほどの力を持っていた。

しかし、ゴルド・エクスペリエンス・レクイエムジョルノ・ジョバァーナのGERによって永遠に死に続けることになってしまった。

その死に続いている中で、ディアボロはある場所に迷い込んだ。

そこは不思議なダンジョンと呼ばれる無限に迷宮が増えていく場所だ。

ディアボロはそこで永遠に死なくなる願いをかなえるために進んでいた。

結果的には、まだその願いはかなえられてはいない。

しばらくベットに転がっていたディアボロだが空間に何らかの違和感を感じた。

家の中がゆがんで見えているのだ。

「こ、これは！」

ディアボロは咄嗟に近くに置いてある亀を手につかんだ。

「どうやら、世界の一巡が始まったみたいだね」

すると、この家の中にいる露伴がしゃべった。

彼はいつもこの家の中にいる。

最初、ディアボロはなぜこの男がいるのか不思議に思っていたが自分のことで精一杯だったので無視していた。

「世界の一巡？ どういうことだ」

ディアボロは露伴に聞いた。

空間はますますゆがんできているので時間がないように思えた。

「世界は一度滅んだ。そして今は、新たな世界が構築されようとし

ているんだよ。・・・この、GERの作った空間が壊れようとして
いるのも新しい世界ができる何らかの力が及んでいるからだろうね」
ディアボロはその言葉を聞いて哑然とした。

このダンジョンにはDISCと呼ばれるスタンド能力が封じられた
物が落ちていた。

ディアボロはそれらも集めていた。
自らを守るために。

ディアボロはこのダンジョンを制覇すれば死に続けないと思ってい
た。

いや、そう思わないと自分の心がもちそうになかったのだ。

それなのに・・・この世界すらもジョルノ・ジョバァーナのGER
のまやかしにすぎなかった。

「何だと・・・それでは、俺は結局・・・ジョルノ・ジョバァーナ
の手のひらの上で踊っていたにすぎなかったというのかあああああ
ああああ！！！！」

消え行く空間の中で、ディアボロの悲痛な叫びが響いた。

そしてそれは、ディアボロの中で大きな亀裂を作ろうとしていた。

しかし、亀裂はできなかった。

「それは違うよ、この世界を作って君をここに呼んだのはGERだ。
けど、これまでしてきたことはすべて君がしたことなんだよ。そし
てそれはこの空間がなくなった先でとても役に立つ」

露伴が言ったその言葉でディアボロの心が折れることは無かった。

そして、ディアボロは露伴の顔を見た後崩れた空間の中に落ちてい
った。

「ディアボロ、君に頼みたいことがある。プッチのスタンド、メイ
ド・イン・ヘブンを倒してくれ」

気がつく、ディアボロは刑務所の中にいた。
どうやら階段のところらしい。

ディアボロは念のためにメタリカ、ザ・ワールド、ホワイト・アルバム。

そして、元からあるキング・クリムゾンを頭に入れた。
ディアボロはメタリカで見えなくした。

さらにキング・クリムゾンのエピタフで近い未来を見た。

そこには・・・少年が妙なスタンドを持った男に襲われているのが見えた。

そのスタンドはディアボロが見たことの無いスタンドだった。
正直戦わなくてもいいだろう。

だが・・・

「たとえこれがジョルノ・ジョバァーナの策略でも、俺は岸部露伴に頼まれた。だったら、するまでだ」

次の瞬間、予知で見た少年が出てきた。

そしてその少年はディアボロのいるほうに走ってきた。

だが、その少年は箒を踏みその棒が顔面に当たった。

そして飛んでいって壁に吸い込まれた。

いや、壁の隙間に入ったというべきか。

そして、予知で見た黒人で神父の服装をした男・・・プッチが走ってきた。

ディアボロはタイミングをまった。

「（自分に最も近い距離まで・・・3、2、1・・・いまだ！）」
ディアボロは背後からキングクリムゾンを出してプッチのスタンドを殴りつけた。

・・・はずだった。

だが、その攻撃はあたることはなかった。

そしてディアボロは世界の一巡が無効になったあとにも死に続けることとなる。

だが、ディアボロは知らない。

再び死に続けたその先で、何が起こるかということ。

世界の二巡の終わりと新たな始まり（後書き）

ディアボロの性格がやわらかくなっているのは死に続けた体験をしてさらに不思議なダンジョンでも死に続けてその間に自分のことを客観的に見れるようになって自分が最低な人間だったことに気づいたからです。

ちなみに今後のディアボロの目標はゴールド・エクスペリエンス・レクイエムGERの能力から開放され平凡に暮らすことです。

・・・吉良吉影と同じ考えになりましたね。

ディアボロ、死す！？

幻想郷、それは人間と妖怪が共存して暮らす楽園。
幻想郷には忘れ去られたものが流れ着く、忘れ去られた場所なのである。

そんな幻想郷には、外来人と呼ばれる外から流れ着く者たちがいる。
だが、外来人はたまたま流れ着いただけの者が多い。
なぜなら、人間が忘れ去られることなど無いに等しいからだ。

「はっ！？次は、次はどこから襲ってくる！？」

ディアボロは咄嗟に周りを見渡した。

周りをみると木がたくさんあることから森の中ということがわかった。

ディアボロはそれを知るとさまざまな死に方を想像した。

熊に襲われて再起不能、木が倒れてきて再起不能、蛇に襲われて再起不能、毒キノコを食べて再起不能、絶望の番人に襲われ再起不能などさまざまなことを。

しかし、それらはディアボロにとってすべて経験した死に方だ。

実はディアボロの死に方にはある特性がある。

それは、一度死んだ死に方では死なないということだ。

だが、それは角度、攻撃、時間などがかさならなかったらの話だ。
しかし、ディアボロはすでに地球上の生命の数以上は死に続けている。

つまり、その数だけでもう死ぬことは無いということだ。

だが、死に方にはさまざまなものがある。

だからディアボロは今も死に続けているのである。

ディアボロは落ち着くために深呼吸をすると地面に寝転がった。

いつ死んでもいいように気持ちを落ち着かせているのだ。

・・・だが、十分経つてもディアボロは死ななかった。

おかしい、ディアボロはそう思った。

いつもならこのころにはもう死んでいるはずなのだ。

ディアボロは、地面に寝転がるのをやめて立ち上がった。

「・・・周りを探索してみるか」

探索していたらそのうち死ぬだろう、ディアボロはそう思った。

ディアボロは森の中を探索し始めた。

それと同時に、ディアボロは久々にスタンドを出してみた。

「・・・キング・クリムゾン！」

すると背後からディアボロ自身のスタンドであるキング・クリムゾンが出てきた。

そして、ディアボロはエピタフで未来を見た。

だが・・・それでディアボロはあることに気づいた。

「なに・・・」

それは、エピタフが未来予知した未来が3、4秒後のものだったということだ。

ディアボロのスタンドであるエピタフは通常十数秒後ほどの未来を見ることができる。

それがたった数秒後の未来しか見えないということは。

「スタンドが・・・弱体化しているだ」と

ディアボロはその事態を知るとある過程が浮かんた。

スタンドとは、いわば精神が具現化したもの。

つまり精神が変化したらその分スタンドが強化されたり弱体化したりする。

「・・・まさか、俺の精神がダンジョンにいたときより衰えたというのか・・・」

ディアボロは、ダンジョンから放り出されてプッチと戦って死んだ後から再び死に続けていた。

その死に続けている中で、スタンドや記憶のDISCをしまってい

る亀はどこかに行ってしまった。

ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム

あの亀はディアボロのよそうだとGERによって生み出されたものだろうから滅びることは無いと考えたディアボロはいつか死ななくなったら探し出そうと思っていた。

しかし、それが後のある事態を引き起こすこととなる。

ディアボロが歩いていると、さまざまな花が咲いた花畑に着いた。

「花か。・・・だが、ここの花は手入れされていることから自然に生まれたものではないようだな。近くに人でも住んでいるのか？」

ディアボロはまずはここに住んでいる人から話を聞こうと思った。

だが、次の瞬間エピタフの数秒後の未来予知を見たディアボロは咄嗟にキング・クリムゾンを出し、

「キング・クリムゾン！」

キング・クリムゾンのスタンド能力を使用した。

ディアボロのスタンドのキング・クリムゾンは時を吹き飛ばす力を持っている。

だが、今のディアボロでは五秒が限界というところだろう。

ディアボロはキング・クリムゾンの能力を使うと背後を見た。

そこには、傘をディアボロに刺そうとしている女性の姿が見えた。

ディアボロは時の吹き飛ばしている空間で女性から距離を取った。

「時は再始動する」

すると、ディアボロの後ろに立っていた女性は驚いていた。

傘を突き刺したはずのディアボロが自分の後ろに立っていたからだ。

「・・・あなた、何者」

女性はそう言うと言ったディアボロの方に振り向いた。

ディアボロは冷や汗を流した。

このような経験はギャングをしていたときでもあまり無かったことだ。

ディアボロはそのとき、戦うという思いより生まれたのは・・・逃げるといっただけだった。

ディアボロは無意識のうちに彼女に背を向けて走り出した。

しかし、相手も逃がす気はまったく無いようだ。

彼女はディアボロを追ってきた。

「くっ・・・早すぎる、やつは人間なのか？」

このときディアボロはまだ知らない。

相手が妖怪であるということが。

しかも、その妖怪の中でもトップクラスの力を秘めているということ。

そして、このとき直感的にディアボロはこう思った。

「ああ・・・死亡フラグが立ってしまったな」

次の瞬間、ディアボロの体が女性の放たれた光線によって消し炭になった。

「ディアボロ、女性の放った光線に焼かれ消し炭になり再起不能」

ディアボロ、死す！？（後書き）

題名からしてネタばれすぎる。

もちろん狙ってやりましたよ。

ディアボロは死んでしまった。

このままこの作品も終わってしまう・・・わけないです。

次回も続きますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397x/>

ディアボロは非日常的な日常に投げ込まれる！

2011年10月21日02時59分発行